

国営かんがい排水事業(国営流域水質保全機能増進事業)

八郎潟地区

事業概要



農林水産省

東北農政局 八郎潟農業水利事業所

八郎潟干拓の成りたち

干拓前の八郎潟は、当時、日本で琵琶湖に次いで二番目に大きな湖であり、船越水道で日本海とつながっていた汽水湖で、最深部でも水深4～5mと非常に浅く、湖底は平坦で、地元では「潟」と呼ばれていました。

八郎潟の開発計画は、安政年間の渡部斧松による八郎潟疎水計画以来、太平洋戦争直後まで幾度も立案されましたが、財政、その他の事情により、いずれも実現しませんでした。

しかし、戦後の食糧不足等を解消するため、昭和27年、農林省が食糧増産5カ年計画を策定したのと歩調を合わせて、昭和27年7月に東北農地事務局八郎潟干拓調査事務所が秋田市に設置され、現地での調査・調整等を進めるとともに、オランダの対外援助機構（NEDECO）の技術協力等を得て昭和31年度に事業計画が完成し、昭和32年度に国の直轄干拓事業として着工する運びとなりました。

その後、八郎潟干拓建設事務所及びその傘下に北部、東部、南部の3つの干拓建設事業所が設置され、干拓堤防を始めとして防潮水門、南北両排水機場等の基幹施設等の建設、船越水道の開削、周辺干拓地等の整備を経て、昭和41年の中央干拓地の全面干陸をもって、基幹工事は、ほとんど完成するに至りました。

一方、中央干拓地では、昭和39年10月に新村「大潟村」が誕生し、その社会基盤の整備と中央干拓地内の農地・農業用施設等の整備を一体的に実施する必要から、昭和40年度に「八郎潟新農村建設事業団」が設立され、大潟村の農業基盤整備、農家住宅、村役場、学校、上下水道及び農業用施設の建設、その他の事業が進められることとなりました。

また、中央干拓地内の農地及び施設の整備と合わせて、昭和41年から入植者の募集が開始され、応募者の書類審査、筆記・面接試験が行われ、入植が決定した者は、1年間の入植訓練を経て入植し、営農を開始しました。その後、入植者の募集は昭和49年まで5次にわたって行われ、入植者数は580戸、農地配分面積は8,860ha（1戸あたり約15ha）となりました。

このほか、八郎潟周辺市町村の農漁業家への増反分として、中央干拓地2,001ha（2,048戸）、周辺干拓地1,136ha（2,373戸）が配分されました。

こうして、昭和52年3月、約20年にわたる国営八郎潟干拓建設事業が完成し、大潟村が日本のモデル農村として、大型機械による効率的な農業経営を実践する基盤が整いました。



干拓前



干拓後

国営八郎潟干拓事業の概要

総事業費	852億円	主 要 施 設	
国営干拓事業費	543億円	防潮水門	1ヶ所
事業団事業費	309億円	南部排水機場	1ヶ所
干拓面積	17,239ha	北部排水機場	1ヶ所
中央干拓地	15,666ha	浜口機場	1ヶ所
周辺干拓地	1,573ha	幹線用水路	L= 95.8km
農地面積	12,792ha	中央幹線排水路	L= 16.0km
中央干拓地	11,741ha	一級幹線排水路	L= 6.3km
周辺干拓地	1,051ha	支線排水路	L=115.8km
八郎潟残存湖面積	4,785ha	幹線道路	L= 68.3km